

日吉に響く楽の音に導かれて

文学部 教授 高橋宣也 たかはしのぶや

広々とした日吉のキャンパスでは、学業を超えた学生たちの若々しい息吹がいつも伝わってくる。グラウンドでの運動の声、アカペラの練習に余念のない集団、劇団の公演を告げる立て看板……。とりわけ私の耳をそばだてさせるのは、楽器の音だ。きつとワグネル・ソサイエティー・オーケストラの団員が次の演奏会に向けて練習に励んでいるのだろう。すると記憶は自ずと、自分がこのオケにいた学生時代に遡る。入学式で聴いたワグナーの生演奏に陶醉してそのまま初心者で入部し、かさばるチェロを担いで、今では建て替えられた第3校舎の落書きだらけの集会室で主にあつた週3回の練習に勤しんだのだった。

文学部2年生進級で専攻を決めるとき、美学美術史学にひかれつつも英米文学を選んだ。しかしオケへの熱意が止むことはなく、ゼミ活動もそこそこに三田から日吉へ通い続けた。ヨーロッパ演奏旅行でウィーンの前奏クフェラインザールの舞台に立ったときは、人生の頂点を極めたと思ったものだ。ワグネルに情熱を注いだ学部生時代。

だが英米文学専攻に進んだことは、思えばこれが人生行路のターニングポイントだった。たとえ音楽が好きであっても、これからは英語・英文学を主たる研究対象とするのだという覚悟が必要だったのである。ところがそう腹を決めると、そこに音楽という軸線を置くことで自分なりの研究スタンスが見えてくるようになった。文学はともかく、音楽愛については人後に落ちない自負があるから、この二つのジャンルの相互的な影響関係をさまざまな局面に追っていくことが自分の柱となるテーマとなったのである。ただこの行き方には虻蜂取らずとなる危うさがあるので、研究姿勢は常に謙虚であるべしと自戒している。

それでも、本とCDで埋まった日吉の研究室から夜遅くになると、暗い中庭でまだ音出ししている遠い後輩の姿にかつての我が身が重なり、自分を「文学にかこつけた音楽への道」にいざなったこのキャンパスに今も通える幸せを思うのである。



1985年、ウィーンのムジークフェラインザールで

談話室

教員によるエッセイコーナー